山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第31号
2018年7月31日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

山口県立大学における鷺流狂言公演の歩み

稲　田　秀　雄（センター長）

平成30年（2018）1月28日、本学講堂（桜圃会館）にて、第10回の「鷺流狂言 in 山口県立大学」が開催され、約300名の参加があった。平成20年以来本学で開催してきた鷺流狂言（山口県指定無形文化財）の公演は、この第10回をもって最終回となる。この機会に、これまでの公演内容を以下に記録しておくことにしたい。

1、「山口県立大学と鷺流狂言～石川弥一から五十年～　春の日舞台」、平成20（2008）年3月20日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）。大学院国際文化学研究科主催。第1回は、本学の前身・山口女子短期大学教授であった石川弥一氏が『山口に残存する鷺流狂言』（山口市鰐石能狂言研究会、昭和32年〈1957〉）を刊行してから50年目を迎えることを記念する催しであった。上演演目は、米本太郎氏（山口鷺流狂言保存会会員）が国際文化学研究科修士論文で対象とした「瓜盗人」の自身による試演を中心とした。小林責氏（武蔵野大学名誉教授・山口鷺流狂言特別顧問）の講演（「山口県立大学と鷺流狂言」）に続き、「瓜盗人」、一管「鷺乱」、「しびり」「盆山（ぼんさん）」「颯果（さっか）」上演。一管は、能管（笛）の独奏。「瓜盗人」は、囃子を必要とする狂言であるので、この回は、笛奏者の根岸啓子氏が米本太郎氏の先輩として友情出演され、「瓜盗人」及び「鷺乱」の演奏を担当していただいたのは、特筆すべきことであった。「瓜盗人」は、保存会としての上演が長らく絶えていた演目である。笛のみとはいえ、囃子を入れての本格的上演はこの時が初めてであった。

2、「鷺流狂言　秋の特別公演 in 山口県立大学」、平成21（2009）年11月23日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、国際文化学部主催、郷土文学資料センター共催。「鬼瓦」「文荷（ふみにない）」「清水」、狂言ワークショップあり。この回から、国際文化学部主催となる。

3、「鷺流狂言　新春特別公演 in 山口県立大学」、平成23年（2011）1月23日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、国際文化学部主催、郷土文学資料センター共催。「鬼瓦」「棒しばり」「宮城野」上演。この回から、1月下旬日曜日の開催となり、以下、最終回までその時期に定着することとなる。山口鷺流狂言保存会としても、その年の定期公演（おおむね10～11月）が終了しているので、いささか余裕のある時期でもあった。

4、「鷺流狂言 in 山口県立大学」、平成24年（2012）1月22日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、国際文化学部主催、郷土文学資料センター共催。「不毒（ふす）」「柿山伏」「引括（ひっくくり）」上演。質疑とトークあり。この回からは、定期的な催しとするつもりで、「特別公演」という名目をはずすことになった。

5、「鷺流狂言 in 山口県立大学」、平成25年（2013）1月27日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文学資料センター主催、国際文化学部共催。「神鳴り」「しびり」「蚊角力（かずもう）」上演。質疑とトークあり。この回より、当センターの主催となり、センターの予算による運営体制が整った。

6、「鷺流狂言 in 山口県立大学（第6回）」、平成26年（2014）1月26日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文学資料センター主催、国際文化学部共催。「清水」「鎌腹（かまばら）」「千鳥」上演。質疑とトークあり。

7、「鷺流狂言 in 山口県立大学（第7回）」、平成27年（2015）1月25日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文学資料センター主催、国際文化学部共催。「船（ふね）ふな」「颯果」「狸騙（たぬきだまし）」上演。トークとワークショップあり。「狸騙」は、米本文明氏（山口鷺流狂言保存会会員・技術保持者）による新作で、この回が初演。後に定期公演でも上演された。

8、「鷺流狂言 in 山口県立大学（第8回）」、平成28年（2016）1月24日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文

学資料センター主催、国際文化学部共催。「棒しばり」「膏薬煉（こうやくねり）」「二人大名」上演。トーク「センター大学での鷺流狂言公演について」（ロバート・シャルコフ教授〈当時〉・米本太郎氏・稲田秀雄）あり。

9、「鷺流狂言 in 山口県立大学（第9回）」、平成29年（2017）1月22日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文学資料センター主催、国際文化学部共催。「宮城野」「清水」「颯果」上演。「宮城野」は、米本太郎氏の指導を受けた大殿中学の生徒による上演。トーク（「宮城野」出演者・米本太郎・稲田秀雄）あり。

10、「鷺流狂言 in 山口県立大学（第10回）」、平成30年（2018）1月28日、於山口県立大学講堂（桜圃会館）、郷土文学資料センター主催、国際文化学部共催。「墨塗り」「末広がり」上演。本学文化創造学科学生によるパネル・ディスカッションあり。

以上のいずれの回も、白松あつ子氏に司会をお願いした。また、上演演目の解説は、稲田秀雄が担当した。郷土文学資料センター主催となって以降は、当センター所蔵の鷺流狂言関係資料の一部をロビーに展示し、稲田が休憩時間に資料を前にして説明を行うようになった。第2回以降は、14時開演で2時間程度の公演形態が定着した。狂言の上演演目は、3番を基本としたが、最終回のみ2番の上演となった。最終回の演目「末広がり」が比較的上演時間の長い曲であり、学生のワークショップに時間を割くためでもあった。

この間の上演演目は、「颯果」「清水」が各3回、「しびり」「鬼瓦」「棒しばり」「宮城野」が各2回の上演である。あとは、「瓜盗人」以下16番に及ぶ演目を1回ずつ上演していただいたことになる。保存会の現在上演可能な演目は、ほぼ網羅されたといえよう。

ちなみに、平成29年（2017）3月1日に亡くなられた小林栄治氏（技術保持者）には、「颯果」（第1回）、「鬼瓦」（第2回）、「不毒」（第4回）に出演していただいている。保存会最長老で、まさに山口鷺流の芸を代表する小林氏の舞台を学生諸君や地域の皆様に楽しんでもらったことは、本公演にとって1つの誇りでもある。

長きにわたり、本学での公演にご協力くださった山口鷺流狂言保存会の皆様、大学公演を支援していただいたすべての皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げる。

当センターは、石川弥一氏以来のご縁により、山口鷺流狂言関係資料の多くを所蔵している。その縁を大切にしつつ、当センターとして、山口鷺流狂言への支援は今後とも続けていく所存である。大方のご理解とご協力を切にお願いしたい。

「颯果」（第1回公演）
太郎冠者（米本太郎氏）、主人（小林栄治氏）

「不毒」（第4回公演）
太郎冠者（米本文明氏）、次郎冠者（米本次郎氏）

「神鳴り」（第5回公演）
雷（伊藤隆氏）、医者（米本次郎氏）

コミック・アニメ「文豪ストレイドッグス」とのコラボレーション

中　原　　豊（中原中也記念館）

朝霧カフカ原作・春河３５作画の「文豪ストレイドッグス」（以下「文スト」）というコミックが若者の人気を集めている。実在する内外の文学者をモチーフにしたキャラクターたちが、それぞれの作品名を冠する異能力を駆使してバトルを繰り広げるという作品である。例えば、キャラクターとしての中原中也は小柄で帽子とマントを常に着用しており、「汚れっちまった悲しみに」と名付けられた重力を操る異能力を駆使して戦う。アニメ化、映画化された他、原作者によるオリジナル小説（コミックのノベライズではない）も発表されている。一種の二次創作で、方法としては「忠臣水滸伝」などの戯作に見られる「吹寄」や「綯い交」に近いが、それぞれの文学者の作品との関連は密接ではない。

中原中也記念館では、（株）KADOKAWA のアニメ担当者からコラボの可能性を探る連絡があったのを受け、県立神奈川近代文学館の事例を踏まえて、2016 年の特別企画展「太宰治と中原中也」で「文スト」とコラボを実施した。

提案者であり展示担当であった私がこだわったのは、コミック・アニメを文学と同等に扱い、ふたつの性格の異なる文化の架け橋を設けるということであった。特別企画展は文学的内容のみで構成し、特設コーナーで「文スト」の概略を紹介した上で、太宰の小説「富嶽百景」「人間失格」や中也の詩「憔悴」「六月の雨」の本文が引用されたシーンを紹介したパネルを展示した。描き下ろしイラストをプリントしたノベルティは展示を見て答えるクイズの解答者にプレゼントするかたちを取り、特設コーナーと文学的内容の展示の間にも橋を架けた。

期間中は予想を超える多くの入館者があった。転売を目的にノベルティを多数持ち帰ろうとする人たちを除いて、ルールを守り純粋にコラボを楽しんでくれる、女性を中心とした若者が大半であった。「文スト」ファンは、キャラクターを可愛くデフォルメしたマスコットを愛玩したり、物語をボーイズラブ的に読み替えたりしながら、アグレッシブに作品世界を享受する。そして実在の詩人を「史実中也」と呼び、コミックとは異なるその作品世界にも関心を示した。

二度目のコラボは、思いがけないかたちで実現した。2017 年の中也生誕 110 年記念事業案のうち、「文スト」コラボスタンプラリー案が、他の事業案を押しのけて満額の予算を獲得したからである。ただし、この案は地域の活性化が主目的で記念館の展示との関連が皆無だったので、私から企画展「コミックのなかの中也」を提案し、「文スト」を中心として中也が登場するコミック五作品を取り上げ、展示担当の学芸員の協力を仰いで実在の中也やその作品との関連性を紹介する内容を組み込んだ。

前年同様に多くの若者が湯田温泉を訪れた。記念館の入館者数は二度とも前年同時期の1.86 倍、18 歳以下の割合もそれぞれ2倍、2.7倍に達した。こうした賑わいが華やかに報道される陰で、人気便乗とのご批判もいただく。

私が期待するのは、来館したファンが「文スト」中也とは違った魅力を「史実中也」の作品の中に見出し、詩集を開いたり記念館を再訪してくれることである。そうした動きは少しずつ現れてきているが、真の成果が現れてくるまでにはもっと時間を要すると考えている。

コラボ特設コーナー展示風景（2016）
手前は春河３５氏の描き下ろしイラスト、書架に組み込んだパネルにコミックと太宰、中也の作品との関連を紹介している。

寄贈図書（2018年3月～2018年6月）

防府史談会『山陽道散策―防府の歴史の道を訪ねて―』

寄贈雑誌（2018年3月～2018年6月）

『あらつち』第716～717号（あらつち社）、『大内文化探訪』第36号（大内文化探訪会）、『火山群』第56号（岩国文学協会）、『其桃』第879～883号（「其桃」発行所）、『佐波の里』第46号（防府史談会）、『地橙孫新聞』第18号（兼﨑地橙顕彰会）、『中原中也記念館 館報2018』第23号（中原中也記念館）、『和海藻（にぎめ）』第33号（豊北郷土文化友の会）、『颺』第107号（颺文学会）、『文芸山口』第338～339号（山口県文芸懇話会）、『山彦』第145～146号（山彦発行所）

編集後記

「郷土文学資料センターだより」の編集を、安光所員から、わたくし菱岡憲司が引き継ぎました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本号巻頭は、昨年度の第10回をもって終了した、山口県立大学における鷺流狂言公演について、稲田秀雄センター長に振り返っていただきました。昨年度赴任したばかりの身からすれば、一地方の公立大学が、毎年、大学内で狂言公演を継続して行っていたことの文化的成熟度の高さに、まず驚いたものでした。山口県の指定無形文化財にもなっている鷺流狂言公演が10年の節目を迎えて、一端終了するのはたいへん残念なことですが、10年間の公演の実績は、これからも山口県立大学の財産として残るものであり、その意味でも、中世芸能がご専門の稲田センター長による本稿は、今後も参照されつづける貴重な記録といえます。

長府・功山寺

中原中也記念館の中原豊館長による、中原中也と「文豪ストレイドッグス」のコラボ企画についてのご寄稿も、同じく貴重な記録となっております。企画が実現するまでの詳細な経緯を書き残していただいたのみならず、いかに「史実中也」へ導くかという、傍観者ではなく、担い手としての工夫と苦労をうかがうことができ、郷土文学の継承に関する現実的なヒントにあふれております。

本頁に掲載した写真は、先日訪れた山口県下関市長府にある功山寺の仏殿です。国宝に指定されていることを、恥ずかしながら当地に赴くまで知りませんでした。しかし一見するや、その威容に圧倒され、しばし時を忘れて見入ってしまいました。山口生活は1年半を過ぎたばかりですが、郷土の魅力を発見する日々です。

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2018（平成30）年7月31日